

夏はこれから

特定非営利活動法人 高田暮舎
副理事長 越戸浩貴



夏の朝

2022年7月12日朝7時。夜から網戸にしてある窓から降ってくるのは夏の陽だ。遠くに見える海は夏の海だし、暑い空気が漂っているのはまぎれもなく夏の匂いだ。



私は特に夏が好きだ。海のまちに生まれたのに泳げない、ヒョロヒョロと背が高く決して血色も良くないし、肌が弱くて日焼けできない私は夏のキラキラを全身で享受してきたわけではない。それでも夏は、ときに感傷も伴いながら（だからこそいい）私の特別な季節であり続ける。

寒くて身動きが取れない冬への反発かもしれない。岩手沿岸北部、久慈市の山間に育ち、大学は盛岡、仕事でも仙台までしか住居を移したことがない私にとって、冬に情緒や郷愁を感じるよりもツラさが先に立つ。別に冬自体が悪いわけではない、それは分かるがどうにも消せない感覚だ。

私は、妻と今年2歳になる息子と暮らしている。初めての子育てで体力も気力も削られるが、小さい子ども

もと過ごす夏は楽しい。保育所のチャイム、プールバッグ、カブトムシの匂い。好きだったあの感覚が自分の人生に戻ってくることがとても心地いい。子供の成長とともに、懐かしい夏と初めての夏を過ごすことができるのは幸せだ。

だけど、今年の夏は少しだけ違和感がある。つらい冬を越したにもかかわらず、尖ったつららのかけらが心に残っているように感じて仕方ない。

年明けからどうもうまくまわらない。少し良いことがあるかと思えば悪いことに打ち消される、その繰り返しだ。特に体の不調が顕著で、30代後半に突入したからといってしまえばそれまでだが、それにしてもひどい。

公私共にお世話になっているHさんに愚痴をこぼすと彼女も年明けから悪いが続いているという。「そんな柄でもないけど、一緒にお祓いでもいくか」と2人で苦笑いした。

Hさんと私

Hさんは農家で産直の運営もしている。私が盛岡の大学院生だった頃、復興支援で陸前高田に通っていたときに会った。たぶん、2011年の暮れだった。プレハブの産直でストーブを囲んだのを思い出す。

2013年に私が高田に移住した際には家探しも手伝ってもらった。移住後も家のこと、仕事のことと広くお世話になっている。

軽口を叩き合うのが基本のコミュニケーションなのであまり素直には言えないが、まあ、ありきたりにいえば陸前高田の母とでもいうのだろうか。震災の年からの付き合いなのでもう10年以上の仲になるということか。彼女は今年で60歳。一昨年生まれた私の

息子は、彼女の言葉を借りるのであれば「血のつながっていない孫」だ。

空き家のこと

少し話は変わるが、私は空き家にまつわる仕事をしている。

地方で空き家の仕事をしているという「古民家のリノベ(リノベーション)とか?」と良く聞かれるが、遺品整理や権利問題など地味な部分を専門的に扱う仕事だ。

現在の空き家対策という、どうしてもリノベ、カフェ、ゲストハウスなどおしゃれに使うことをイメージする人が多い。実際にはそれ以前に大きな問題が横たわっている。「どうにもならない家」が圧倒的に多いのだ。10年前まで生活していたままの家財が山のようにある家(家財といっても半分以上はゴミとして処分される)や、相続がされていないとか物件の状況がきわめて良くない家も多い。



さらに言えば家財や相続の問題は表層的なものではない。家という、思い出が堆積した特殊な資産を、前に動かすのも処分するのも、ほとんどの人にとって初めての経験だ。金銭や条件だけで動くものでもない。感情や人間関係も絡んでくるのでそこにパターンや最適解はない。

キラキラした空き家リノベとは別の世界にいる。カッコいいことは誰かに任せればいい、カッコいいんだから誰かがやるのだ。そういうのは震災後に星の数ほど見てきただろうと自分に問いかける。

本当に必要だけども見向きされない、誰もやらないことをやる。そこに自分なりの矜持がある。

志を強く持って、ビビらずにやるという威勢の良さとは裏腹に、増える相談に四苦八苦、その割に売上が安定せずヒヤヒヤ。でも、理解ある仲間と一緒に体を動かして、一軒一軒のこんがらがった状況に向き合うのは割と心地いいものだ。

遺品のこと

こういった姿勢はHさんから学んだことが多い。学んだというよりは勝手に感じたというのが実際のところだけど、Hさんは新規就農者の育成(というよりは「お世話」の方が正確か)や産直運営では他の人がやらない面倒を一手に引き受けてやっている。お人好しな部分もあるのだろうが、本当に大事なことを見逃さない目は確かだと思う。

遺品整理の現場というのは実はにぎやかなものだ。親族が立ち会う場合には、立ち合いというよりも共同作業という感じで「古いアルバムでできましたよ、大切そうなものですけど、どうしますかー?」「うーん、ちょっと見てみるからそこに置いといて!」「うわー、なつかしい! ちょっと見てみてこれ!」と言った具合に思い出が溢れ出す。

体を動かすことでテンションも上がるのだろうか。思い出を見返しながら、最終的にスッキリした家を眺めるときには、私たちと所有者の間には不思議な縁が生まれている。

誰かの思い出の品をゴミとして処分するのは心苦しいから、なるべく再利用したい。古物の買取や再販にも力を入れていきたいがまだまだ駆け出した。私には用途がわからないものが多い。そういう時はHさんに現場を見てもらう。



「なつかしいな一豆炭の行火（あんか）」

「あー、このニットは今のばあちゃんたちの若いときに流行ったのよ。ほら、ここに穴が空いてて通すとマフラーになるべ？」

「錆びたスコップとか鉋は引き取ろうか？ うちの産直に置いとけば欲しい人いると思うよ」

私のような若造が現場を見るのとは訳が違う。空き家から出てくるものを全て活用したい！なんて理想を掲げたって、到底かなわない。

Hさんのこと

Hさんは津波で長男、長女、自身の弟を亡くしている。彼女の気持ちを私がここで書くことなんてできないし、するつもりもない。

Hさんが遺族会として奔走する姿をみた。行政機関に務めた2人の子の死に向き合い、時に政治とぶつかりながらエネルギーを燃やし続けた姿を見た。その心の内は誰にも見ることはできない。

遺族会の活動や、毎年3月が近づくたびの取材ラッシュに疲れ果てた顔をみた。諦めたようにも見えるし何かを受け入れたような顔にも見えた。

2年ほど前だったか「子を失った時から別の生き物になった」というHさんの言葉を聞いた。心の内も気持ちの変化も分からない。ただ、別の生き物になったという事実には妙に納得した。

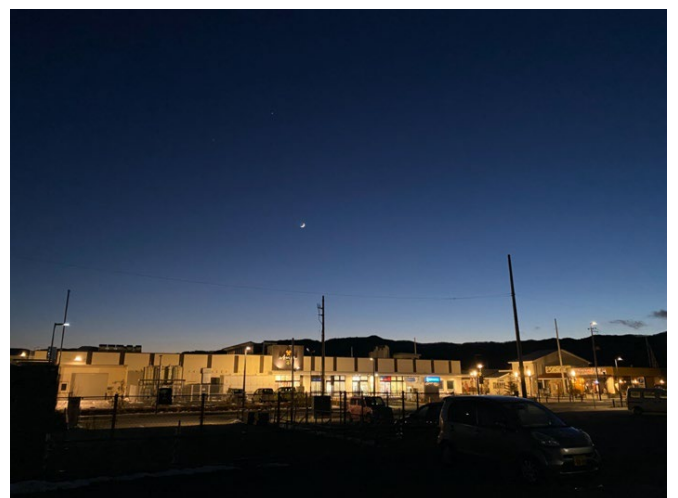
小さな傷は自然に（ほぼ）復元して（ほぼ）元通りになる。でも、大きすぎる傷は元通りにならず、内面に表面に残り、その人を変えてしまう。傷が人を引っ張り回す。過去の時間も、未来の時間もその意味を変えてしまう。

誰にも見えない心を抱えて、子を失い別の生き物になった彼女は意識的にも無意識にもエネルギーに転換して、自分を形作ってきたのだろうか。前向きであろうと後ろ向きであろうと。

震災後

Hさんの周りには震災後たくさんの方がいた、私を含め。その多くが震災後の彼女しか知らない。それは別の生き物になった彼女を慕うということなのか。確かにそういう時期はあったように思う。あの当時の熱気の渦ともいえるような空気、そのなかでHさんのように強烈なエネルギーを発する人に私たちは惹きつけられた。

今はどうなのだろう。2013年に陸前高田に移住した私は、当初こそ復興の大きな波の中にいることを感じた。しかし、復興支援の立ち位置で外からまちを見るのとは違う世界があることに気づいた。いや、世界という大げさで、自分とまちの関係の多くを生活と実務が占めるようになるというのが正しいか。



ここで触れるまでもないが、復興まちづくりの過程においては遺族、被災者、政治で意見の違いがある。それは大きな溝になって、この小さなまちで手を取り合えない人たちがたくさんいる。

例えば、目を疑うような大規模な高台造成工事。ポツポツとしか建物が無い中心市街地、雑草が主役かのように目立つ空き地は、まちの未来を悲観的に見せるには十分すぎた。造成工事の安全性、土地利用の実現性など様々な立場の声が飛び交う。誰もが納得する答えはなく、人々の間に溝だけが残る。

それでも、その溝を内包して、まちは徐々に生活の場になっていく。

家やお店が増え空白が少しずつ埋まり、徒歩でまちを行き来する人が増えた。3、4年前だったか、図書館で勉強する高校生や公園で遊ぶ親子の姿が見られるようになった。

課題が消えたわけでもないし、溝がなくなったわけでもないが、少しずつまちの姿は穏やかになっていく。

まちだけでなく、傷を負った人たちもまた、傷を内包しながらも穏やかな未来に向かっていくのだろうか。Hさんが子を失ったことで別の生き物になったことは変えられないだろう。でも、そのうえで、数十年という時間の中にせめて穏やかな変化があればと思う。(震災からの時間の経過、家族を持ったこと、私にとってこういうことを考えるタイミングだったのだろう。子を失うことや、自分が早くにこの世を去ることなど、Hさんに重ねてあれこれ考えてしまう)

喪失

今年3月、Hさんの夫が亡くなった。入院からわずか1ヶ月、言葉にならない出来事だった。上旬に私の妻と息子がコロナに感染し、妻は入院するほどで、とても不安な日々を過ごした。妻の退院、家族全員の隔離が終わりホッとして間もないタイミングでの訃報に言葉を失った。

Hさんの夫。口数少なく優しい笑顔で、居間のソファにもたれかかりながらアルコール度数が低い可愛

い色の缶チューハイを飲んでいる姿が思い起こされた。

何かと目立ち主張が強いHさんとの不思議で絶妙なバランスは、私にとって夫婦の在り方の一つを示してもらったように思う。

「なんであの人にこんなことが」「なんでまた3月に」と言いようのない気持ちに駆られた。

気が沈む時期だった。Hさんに葬儀場であいさつをして1週間ほど立った頃、兼ねてから体調が悪かった私は病院で検査をし、病気の芽がいくつか見つかった。すぐにどうこうというものではないが思ったよりも良くない。人生の先にある存在だった死が、生活の連続の先に現れた感覚は忘れられない。

家のサイクル

Hさんから家の荷物整理の相談をされたのはそのすぐあとだった。話を聞くに生前整理という意味合いが強そうだ。自分がいつどうなるかは分からない、長生きする保証なんてないということに気づいたという。

「遺品整理とか気にせずに死ぬ日まで自分らしく暮らす」と言っていたのを前に聞いたことがある。この変化が前向きなものとは思えなかった。無理のない話だが、ここ最近、Hさんの中の火がポッと消えたように感じるのだ。

子を失った夫婦の11年。これからの数十年、せめて老後まで穏やかな未来であってほしかった。

生前整理の相談をどう受け止めたらいいのか判断がつかかねるまま、一旦、屋根裏の状態確認をすることになった。と、一歩めでつまずく。屋根裏に続く収納階段が動かない。家の外壁に梯子をかけよじ登り、古い木枠の窓を無理やり開けて中に入る。なるほど、地震で荷が崩れ階段の可動部分を邪魔していた。

裸電球のスイッチを捻る。築100年以上の古い農家の家。屋根裏といってもかなり広い。

大きな長持、嫁入り道具のダンス、冠婚葬祭用のお膳にお椀、赤ちゃんのお風呂などが一角にあった。

前に H さんが話していたのを思い出す。確か、おっぴばあちゃん（ひいおばあちゃん）の形見分けをした時の話題から広がった。「おっぴばあさん、おっぴじいさんを見て、じいさんばあさんを見て、今度は自分が子どもにみられるようになって。そういう家のサイクルがあると思っていたのよ。でも、震災があって子どもがいなくなって自分はそのサイクルにいないんだと気づいたのね」

屋根裏にある古いものたちは紛れもなく、家のサイクルを支えてきたものたちだった。

「おーい、おらは病院に行くから戸締まりよろしくねー」

驚くべきマイペース。人の家の屋根裏に 1 人残される滅多にない経験をした。

崩れていた荷を起し、少しホコリを払って階段を使えるようにした。多い時で 8 人が住んでいたという H さんの家を眺めながら家を出た。遺品整理の仕事を始めたときに「自分の知り合いの家を扱うのはちょっとつらいなあ」とぼんやり考えたことを思い出した。と同時に今の自分の中ではある程度覚悟ができていくことにも気づいた。

入院

7 月上旬、H さんは入院した。持病が悪化して、入院翌日に手術になった。一般的には危険な手術ではない。でも、ここ最近の疲労と今の気力を考えると心配になった。

退院

H さんから連絡があり、手術も無事終わり 10 日で退院して戻ってきたということで、まずはホッとした。まだ本調子ではないらしく声のトーンが低いのが痛々しい。

退院祝いにちょっと高いケーキを用意して妻と息子とともに H さんの家に行った。H さんの夫の仏前に手を合わせ、息子を広い家で走り回らせる。H さんはいえ何やらタブレットをいじっている。生命保

険のアカウントにうまくログインできないようだ。ログインだけ手伝ってケーキを食べた。生命保険の内容については話さなかった。

梅雨明け間近と思っていたが、雨が続き、夏はまだどこかへ行ってしまった。



入院の件もあり、H さんの家の整理の話は一旦ストップしている。外は大雨だが、来週には梅雨が明けはすなので、天気がいい日にもう一度 H さんの家の様子を見に行こう。

戻ってきた夏が少しの前向きさを運んでくれるかもしれない。

夏はこれから

この文章は 10 年後に自分が読み返すためのものだと思って書いている。復興と倫理というテーマをいただいた時に、理論立てたものや体系的なもの、統計的なものは書けないと直感したのだ。

この 11 年もこれからの 10 年だって「震災から〇〇年目の被災地」とか「遺族の今」とかいう言葉で一般化したくない。

（当たり前だが）防災、教育、都市計画、福祉など多くの分野で統計や一般化は必要だ。だから、これは「私が書くなら」一般化したくないというただの意固地な感情だ。コンサルでもない、政治家でもない、芸

術家でもない。このまちで実務的にやることを選んだ自分の立ち位置の問題だ。

さらに言えば、誰かが生きたことや死んだことに勝手に意味をつけるのは好きじゃない。たくさんの命が消えてしまったまちで誰かの気持ちを代弁するようなこともしたくない。

自分の立ち位置を見定めて、洞察力と愛情を持って人と接して、自分の見解をしっかりと示していく他ないように思う。なんとも面倒くさい人間だ。まあ、この辺も H さんから学んだ（学んでしまった）性質な気がする。

11 年前から刺さったままの尖ったつらら。それがつけた傷は治りようがないかもしれない。でもそのつららを少しずつ溶かすことはできるんじゃないか。10 年後に H さんと「あの時はきつかったなあ」と穏やかに話すことができるように「血のつながっていない息子」ができることは、まあいくらかはあると思う。

まずは、息子を連れて H さんが産直で出しているでっかいかき氷でも食べに行こう。

